求道と歩む

中川庫吉著

特223
134

始

求道と歩む

中川庫吉著

特223
134

特 223
154

はしがき

もう三年すれば、私も五十路の坂にさしかゝる。歩み來りし道を振り返つては、流石に無量の感慨なきを得ない。

鐵火の如き信仰に生涯を捧げられた布教師を母として、かりそめの生を此の世に授かつた私は、既にして幼少の頃より、やまさかやいばらぐろうの運命に甘んじなければならなかつた。水火をくゞる苦勞に、やつとの思ひで荒道を通り拔け、今日曷る如き私を迎え得たのは、私の母が、私の魂深く植え付けて呉れた、搖ぎないお道の信仰に據るものであると、今でも固く信じて疑はぬ。

仍ち、かゝる道すがらのくさぐさが、さゝやかな內容として、本書に盛られた譯である。體驗談に私の解釋による教理を織りなしつゝ、固苦しい束帶などサラリと解いて、出來るだけくだけた氣持ちで語つたつもりである。

にちにちに神のはなしをたんたんときいてたのしめこふきなるぞや
と言ふ神言があるが、敢然と身を挺する苦悶の道の只中にあつて、永遠に滅ぶことのない眞の神の道（こふき）を發見するところに、宗教人として酌めども盡きぬ悦びの泉があるのではないか。

私の抱く信念が多少とも讀者の琴線にふれ得たとするならば、著者の辛ひ之に過ぐるものはないであらう。

昭和九年六月

著者識す

荒道を歩む

目次

第一章　奇しき生ひ立ち……一
猿轡をはめられた私……三
天理教の小僧……八
懐しの母よ……一六
鹽を甜めて暮せ……二三
第二章　初期のお助け……三一
滑稽な茶番の話……三三
百萬圓出しても買えぬ大根……四〇
狐狸の住家を訪ねて……四四
人に負かされる勉强……四九
第三章　道すがら……五七

世間並の望みを捨てよ……五九
通り返しの道……六二
娘さんに一言す……六四
憎まれ子世に憚る……六六
眞實偉い人とは……六八
第四章　大節を通りて……七一
死線を越える……七三
寶の持腐れ……七七
犬信心では駄目……八〇
苦しかりきあの頃……八四
附　錄
▽子は親の鏡……九一
▽アリアリと見える神……九七

第一章　奇しき生ひ立ち

猿轡をはめられた私

私は考へますのに『兎角少年時代と云ふものは惠まれない方がよい』と私は云ひたいのであります。

此の言葉は大變冷やかな樣に聽へるかも知れませんが、それは斯う云ふ譯なのであります。卽ち惠まれない生活を享けて來た人達は豊かな生活を享けた人達に比らべて何處となくしつかりして居る。云ひ換えますと苦しい生活の苦しみを多く享けて居る人程精神的に苦しめられて居る。其の苦しめられる事が其の人を一段づゝ磨いて行く材料となるのです。それ故今迄の例を見ましてもお金持ちの子供は何處となしにぼんくらである。つまり苦勞が其の人の人格を作るのであると私は申上げたいのです。

私は不幸にして八歳迄しか母と生活する事が出來なかつたのでした。當時母は朝は早くから夜は更くまでお助けに歩いて居りました。然かし其の時代には未だ御本部か

ら教導職と云ふ布教師の資格も頂けなかつた爲めに警察からの壓迫が激しかつたので御助けから歸つて來る母はいつも顔と云はず手と云はず打たれた生傷が絶へませんでした。

それを見るにつけましても私は母に天理教などは止めてくれと泣いてせがんだものでした。私の七歳の時母は九日間の拘留を受けましたが母が歸つて來ない時などは御飯も食べる事が出來ない事がありました。其の時などはつく〴〵母をうらみました。それのみか私の學校の往復には私が天理教の子供であると云ふ所から友達仲間にいつも屹度ひどくいぢめられて居りました。そうこうしてゐる中に私は母と別れなければならない日が來ました。それで私は或る天理教反對の農家に預けられまして、それからは今迄と異つた苦しみを受けることゝなりました。夜は九時と云ふと主人の飲む酒を買ひにやらされました。三錢と二合壜を持つて（當時上等で一升十八錢位でした）墓を通り森を抜けて行くのです。酒やの主人は安賣するので附近では評判でしたが、

私が行く時は何時でも天理教の小僧だからと云つて量をへらします。

ですから主人は私が買つて來た酒が少いからと云ひ貴樣が飲んだのだらうと無理難題を言つて私を折檻し始めるのです。或る晩の事矢張り酒の量が壜一ぱい無いので、又叱られる辛さに水を增して行きました。處がそれが判つて貴樣が飲んで水を入れて來やがつたと言ひざま猿轡をはめられて金火箸で打たれたのを覺へてゐます。又私の居つた農家の妻君は年寄りの爲め子守りは私がして居ました。二文錢を渡して置き乍ら一錢渡したとせめ立てゝ八厘を何處で使つたなどゝ責められたこともありました。

こんないぢめられづめの私は本當に乞食の子の樣な姿でした。學校へは行かしてくれましたがそれも學校へ行く前に私は台所の事や子供のおしめの洗濯が片付かない中は行かれなかつたのです。そのために學校では二時間目の授業が濟む時刻になりますので、學校の規則を破ると云つて受付の先生はひどく叱りつけ、遲れた罰として水の一杯入つて居るコップを一時間も持たせたりしましたが、校長さんが大變同情のある

方で私の家庭の事情をよく御存じであつたため、中途で許して下さつた事もありました。

斯うした苦しみの中に子供ながらに私の頭には苦しみから逃れたいと云ふ考へがムラ〳〵と湧いて來ました。『お前が一人前になつたら引取りに來る』と云ひ殘したきり別れた母が何處に居るやら尋ねる方法もありませんのに、たゞ母戀しさに單身大阪の親戚を賴りに家出をして仕舞つたのでした。途々私は拳を握り一人前になつて屹度今迄の此の虐待に對する復讐はして見せると心に誓ひました。

斯うした私の呪詛は其後十四五年間は片時だに私の頭から去りませなんだ。私が十四歳の折に尿道加答兒を病つたのも之の恨み腹立ちが因をなして居たのでした。

此の時母から人を恨んではいけない、呪つては更によくない、と聞かされ又自分でも反省して見ますと尿が太くなつて思ふ樣に通じて來ました。段々にお道のお話を聽かして頂くにつれて私の人に對する心持ち、又世の中を渡る考へ方を全然變へ得る事

が出來て人には親切にしませうと云ふ心になれたのであります。

其の樣に考へますと先年久し振りでかねて私のうらみとして居た其の人が上京された時などは、心から親に孝養を盡すと同じ心持ちで御待遇が出來ました。そうして居る中に私の尿道加答兒は不思議にもぴつたり全快して仕舞ひました。

斯うした不遇な家庭と虐待の中に育つた人達の常として當然人を恨み、社會を恨むと云ふ思想を植え付けられるものですが、私はそれに深く引き入れられる事もなく神樣のお話を聽かして頂き、日に日にお道の精神を深く考へさして頂き、却て其のために翻然と自分自身の道を覺らして頂く樣になれた。このやうな私の生れ更りは道を信ずる父母白熱的な父母の信念の然らしめた事と感謝して居る次第であります。

讀者の皆樣に於ても決して考へ違ひをせぬ樣、世を恨ます人を恨ます、常に心の反省を御願ひする次第であります。

常日頃聽かして頂くお道のお話を十分心に納めて眞の人となつて頂きたい。

私は常に自我を捨てたいと考へて居ります。子供からの注意も妻からの注意をも同じ心で受け容れたいと心に定め斷へず人から敎へられると云ふ態度で通らして頂いて居ります。

人間はつゝばりの心を捨てゝ絶對服從と云ふ心持ちになつた時初めて自我と云ふ心が捨てられるのではないかと老へさして頂きます。圓滿な人格とは卽ちそれでありませう。

天理敎の小僧

人は常に苦勞の底を通り拔けてこそ人としての堅實な歩み方が出來る樣になるので又いくら苦勞をしても其の苦勞を忘れてしまふ樣では、心の緊張を失ふことになります。私は幼い時の苦しんだ時代七八歳の事でさへ今だに忘れる事は出來ません。

斯の如く私達は自分達が行つて來た所謂罪と名づくる行ひや缺點等を順々にならべて靜かに反省すると、其處に驚くべき反對現象と申しますか、改造された自身の赤裸々な姿を見ることが出來ると思ひます。それが甦生することの出來た現在の我が姿なのであります。私は常に申上げる如く人は自分の欽點を見出し得た時はその人は本當の人間になられた卽ち人としての本心に立歸つたといふ事になるのです。

私が六歳の時でした、當時私達一家は大阪の桃谷にさゝやかな借家住ひをして居ました。兩親はお道の布敎をして居て私一人が留守番です。所が私が何處へ出て行くかわからないので、いつも戸締めで出かけるのです。私の爲めに土鍋にお粥を炊いて置いてくれます。

夏など夜になつても母が歸つて來ない時など、蚊帳なしに寢て仕舞つた事も再三でした。

それに桃谷といふ處は溝渠の多い處で蚊の襲來を受けること甚しいのです。蚊に食

はれた身體を搔く、二三日たつと全身赤はだかになつて、それが遂に疥癬となつて其れに膿を持ちはじめ、くずれ出してそれこそ化物の樣な姿になつて仕舞つたのです。

父が或る日のこと歸つて來まして私のこの姿を見てあまりのことに驚き且つは涙さえ浮かべるのでした。そんなことから間もなく父は私を鄕里丹波の赤熊に送る事にしました。思出すと今の行李位な土持に用ふる籠の中に私を入れて、一方は石を入れた同じ籠をかついで三日かゝつて丹波へ着きました。着いた日は丁度お正月でした、疊六疊に三尺の土間を持つた小屋に等しい家に私達親子は淋しい貧しい正月を迎へねばなりませんでした。食ふものもなく貯へと云つても更になく、父は煙草入れの底をはたいて見つけ出した五錢の金を虎の子の樣に抱いて千切りを(大根干し)買つて來ました。私達はそれを食つて正月を送りました。恰度四日目に母が大阪から歸つて來ました。お正月だと云つて近所の子供は美しい着物を着、お小遣を貰つて樂しさうに遊んでゐる。こんな樣を見せつけられた私は此れ等の人達に比べて何んと云ふ情ない姿な

のだらう、と子供乍らに小さな嫉妬と失望とを感じました。

兩親共揃つてゐるのに何故子供にこんな苦しみをさせるんだらう、と兩親を怨むのでした。それから間もなく何時迄もお互に顏を見合せて居ても仕樣がないからと云つて私と母を殘して父は九州へ旅立ちました。その時私は、母さん私は別に何もいりませんが「お正月だからせめてお餅を食べさせて下さい」と申しました。

母は無言で立ち上りながら物置へ行つて藁を出して來ました。それは丁度正月の六日でした。何をするのかしらと見てゐますと何時の間にか米俵を拾俵程作り上げました。

其れを賣つて餅を買つて來てくれたのでした。其の時の私の心持ちはむしろ悲しみに近い喜びでした。母の子を思ふ氣持、母が私に示してくれた此の貧しい乍らも何の母にも劣らない愛を私自身の母に見出し得た私は、其の時から今迄兩親を矢たらに怨んだ事が此の上もなく濟まない樣に感ぜられました。

それから私は出來得る限り妹の面倒を見て、母の手助けをさして頂きませうと心に誓ひ、又其の通り實行致しました。

母には其の時は既に私の弟（現在四十歳の光之助氏）が生れやうとして居たのでした。

其の年の十月愈々母は產氣付いて弟光之助を生み下ろしましたが、湯を沸さうと思つても釜といふのは有つたが曾つて用ひた事がないので錆付いて蜘蛛の巢だらけと云ふ有樣でまご〳〵して居る中に信徒さんが走せ付けて下さつて、釜を借りるやら湯を沸かすやらスツタモンダ騷いでどうにか濟みましたが、其の時敎會の樣子を本當に知つた信徒さんは實際驚きました。

敎會はお米もない仕末、私達は助けて頂き乍ら申譯ないと云つてお米だの何なりを持つて來て下さる樣な始末でした。所が後產が下りないのです。で母は弟に生湯をつかはすなりすぐと御本部へ參拜に行くと云つて弟をつれて出ました。すると門口

で後產があつたのです。で其の夕方から三日間の豫定で本部へ參拜に行くべく家を出られたのでした。一方私は三歳下の妹の守をしてゐました。

私が種々な事を考へては泣きますと妹も泣くです。兎に角妹を慰めながら兄としての道をつくして居りました。

其の當時の事情からして考へましても、私に信仰がなかつたら必ず誘惑を受けたで有らうと思はるゝ種々な事が考へられます。

其の當時私の村には二三の不良と言はれた子供達が居りました。十二三歳になる子供達で親の金を盜んでは遊び廻つてゐたのです。毎日の樣に銀貨やなべ錢を見せつけてはお前にやらう等と出しますが、私は決して貰ひませんでした。所が村の其處此處に頻々として金や物が失くなると云ふ噂が起りました。

其の時分は何處の家でも味噌越を天井から下して金を出し入れして居たのです。其んな風で其の嫌疑は誰に來たかといふと私に來たのです。あの天理敎の乞食小僧の仕

業に違ひない。食ふに困つてやつたのだと定められてしまひました。村人からは泥棒呼ばはりをされる私、人の物を取らないのに取つたとされて罪人扱ひにされる其の口惜しさを沁々考へた私、これは結局私達の生活が貧乏である爲だ。親が意氣地がないからだと又しても親を怨む樣になつたのです。

或る時私は母に向つて、

「お母さん私達がこんなさけない生活をする爲に村人から罪人扱ひにされます。私はどうしても村に居るのは厭です」

と申しました。母は其の時、

「何事も神樣が御承知です。お前には神樣がついて居られる事を忘れてはいけません人から何と云はれ樣と少しも氣にしてはいけない」

と訓されました。そして約一ケ年と云ふものは村人の私に對する目は相も變らず重罪犯人の樣な扱ひ方です。

それから一年もしてから村の二三の子供の金遣ひが繁しいと段々注意されたあげく遂に現狀を見られて今迄の事實が明らかに證明される樣たなつたのです。それからと云ふものは村の人達は中川さんにあんな嫌疑を懸けて濟まなかつた。段々話しを聞いて見ればあんな孝行者をと嫌疑は同情心に變つてしまつたのです。其の時母は私を懇々と諭しました。

お前が此の世で人のものを盗らずとも盗つたと云はれるのはお前の前世の御詫びです。例へば一錢盗つても五圓盗つたと云はれるのは前世の罪が物を云はせるのです。この因緣の理が吹いて來たのです。だから決して人を怨んだり親を怨んだりしてはいけないと解りやすく云はれました。

實際其の通りで、此の世で作つた罪は此の世でそれだけ罰せられて償をして通れば それでよいと申しますけれ共、神樣の話を聞かせて貰へばもう一つ良い心になつて自分にない罪を着せられても人を恨ます、世を憎ます、却つて我身を恨む樣になれば

それこそ本心に歸つたのであると申されませう。人が自分を褒めて呉れる時は調子に乗つてはいけません。人に褒められて居る間其の人には進歩はありません。惡口、輕蔑をされて迫害の中を默々と進んで行く處に、其の人の伸びて行く道が開かれるのです。惡口を云つて呉れる時は敎へられるのだ、磨かれるのだ、缺點がある故言つて呉れるのであると思つて感謝せねばなりません。神樣は常々自分を愛して注意して下さるのである故に、お互に自分でも「ウソ」をつかぬ樣に誓を立てゝ實行する樣に努力しなければなりません。何もむづかしい事を敎へるには及びません。力がなければ無い樣に言葉、動作、心遣ひ、それが自然々々と一致する樣にせねばなりません。斯ふした心で日々を不足なく通らねばならないのです。

懷しの母よ

私の生れた土地は山に圍まれて居り、何處へ行つても山又山を越さなければ成りませんでした。私が奉公にやられてゐて其の主家から山を越えて一里位は樹木が鬱道の樣に成つてゐて晝間でもお化でも出て來そうな小暗い林道を通り拔け、山を越えて大谷の町へ米を買はせにやられた時の事でした。住く道は驅け出しても行さますが歸り道は一斗から一斗五升の白米を未だ小さい體で脊負つて來るのですから、山坂を登る時などは脊中の骨がメイリ込む樣に重かつたのです。それ故私は苦しく成つて半丁歩んでは一息し、一町歩んではつくばり、歸り路は二時間以上もかゝるのでした。冬木枯しがビユー〳〵吹いて居る時など息も塞がつて仕舞そうに成る、然し苦しくとも一生懸命、少しでも早く歸り度いと一心に成つて歸つて見れば、貴樣何をして居つたか遊んでゐたに違ひない、此樣に遲い筈があるものか、太い奴だなんて手當り次第にシンバリ棒や火箸で處嫌はず張り飛ばされます。其時一滴でも涙を溢したり言ひ譯をすればより以上の目に遭はされますから、痛さを耐へて辛棒を續けました。私はつく

〳〵厭やになり、生きてゐるのが辛ひ、何とか志を立てゝ身のたつ方法がつかぬかと種々考へて此家を飛び出そうと隙を窺つては拔け出す事のみを考へて居りました。

其年も暮れ正月に成りましても頭の髮は伸び次第、湯は時々より入れてくれぬ、乞食以上の姿の私はとう〳〵此家を拔け出しまして、一里ばかり先きの親類の家へ辿り着き身を隱まつて貰ひましたが、直きに又見付けられ連れ歸られて、一週間程監禁の身と成りました。

私は後手に縛られて居りましたが、その繩の間から血が泌み出てゐたのに氣が付き自分はなんぼ子供とは言へ兩親もあるのに何と情けない事であらうと兩親を怨む事が一層强く成りまして、一週間目に口でナイフを使つて、足を縛つてある繩を切り、又其家を拔け出し藁小屋に一夜、空屋に一晩を明かしまして、親戚の家に行き何とかして大阪へゆく方法は無いかとお願致しましたら、丁度大阪へ行くと言ふ人がありまして再三再四足を運んで頂いて元の主人から暇を貰ひやつと自由の身に成りました。

然しお金が有る譯では有りませんし、二日もかゝつて漸く大阪へ着きました。着いて見たものゝ、私の行つた先の親類は非常に生活に苦しんで居りますので、私の生活を負擔する力が到底ありませんでした。それで父の居ります南分敎會へ一年程厄介に成る事に成りました。

一體同じ奉公をするにしましても、大阪と云ふ處は朝はお粥と澤庵二三片だけでまご〳〵して居りますと毎朝お粥の上汁ばかりすゝるといふ有樣です。其上朝から晩迄子守役で隨分閉口致しました。何處へ參りましても主從と成つて見れば隔てはあるもので、例へば自分の子供へは一錢やつても私には二厘しか下さらない。二厘では其頃でも芋を求めても切れバシよりくれぬ。それでは腹が滿たぬといつた樣な按配です。

私は子供乍らも此樣に隅てをつけたくはないものだと沁々考へました。

此家でも又竊盜の嫌疑を受けました。取りましたと白狀せぬと、三日でも四日でも飯を喰べさせてくれませんので自分乍らも今更想像も盡かぬ苦勞を致しました。九歲

の秋からの奉公中二回も泥棒の嫌疑を受けた事を熟々考へて見まして、私は前世に犯罪を犯したと存じ神様にお詫致しました。其後下駄屋へ奉公致しましたが、其處は若夫婦者で商賣が一向繁昌しないものですから、十三位の小僧と二人で荷車へ下駄を澤山積んで、それを曳いて今日は住吉明日は何處と何處へでも人出の有りそうな處へ店を出しに歩きました。六里七里を遠しともせず、店を出して見ましても相當の商賣が有りませぬに主人は仲々滿足しません。年上の小僧は怠け者の癖に少しでも云ふ事をきかぬと直ぐゴツ〳〵と鐵拳でやられます。サテ何處へ行つても樂は出來ない。しかも年四圓といふ給金です。いくら物價の安い時代でも此給金ではなか〳〵殘るところがなく、シャツ一枚も買へない狀態でした。十四歳の時迄の五ヶ年の給金は父の九州行の旅費として前借してお供へしたので如何することも出來ず・何處かへ住み換へ度いと思つても、十四歳迄は到底駄目と諦め乍らも何時になつたら人並に兩親と共に一家を支えてゆくことが出來るかと心の中で泣かぬ日はなく、詮方なく勸めて居れば人

からは貴樣は親なしでは無いかと辱められました。此樣な苦しみをするよりは一層死んだ方が增しだなどゝ思ひ込んで或時は玉造の踏切へ三四回も行つて見ました。然し其場に成るとイヤ〳〵今私が此處で死んだなら兩親は如何に嘆くであらうと思ひますと、決して其樣な無分別は出來なく成りましては考へ直しました。即ち此樣の苦しみも親を思へばこそこのやうな苦境にも順應せぬはならぬと考へたのでありませう。

私は十四歳の時母が東京から歸つた夢を見ました。夢のお告げと有り難く思ひ早速主人にお暇を頂き度いと願ひましたが中々許して下さいませんでしたので、無斷で家を出てしまひました。其時母の姿を七年目に見ることが出來ました。其時自分の見すぼらしい姿を母に見せたら母の恥に成る多くの人の手前も考へねばならぬとは思つては居りましたが、母の姿を見る成り恥ぢも外聞もあらばこそ不思不知私は飛び付いて仕舞ひました。

其時母は「庫吉か、お前は親を怨むだらうが怨してくれよ」一人前に成る迄どんな

辛い思ひでもしますからどうか私をお母さんの側に連れて行つて下さいと拜む樣にして申しましても、母は今は布敎の邪魔になる故今少し辛棒せよと言はれ、七年振の對面もほんの瞬間でサッサと天王寺驛へ向け車に乘つて行つて仕舞はれました。後に殘つた私は追ひかけて見ましたがもう汽車は出發した後であつて全く途方に暮れて終ひました。私は更に其上次の汽車で高安迄追ひかけて行き色々に賴みましても連れて歸つては下さいませんでした。其時暗がりの松の木の蔭で親子押問答をして居りましたのを蔭で聞いて居て下さつたのが松村老先生の弟御さんで有りました。其方が母に仰有るのには一人の息子で苦勞するなら私が預つてやらうと云ふ事に成り、其後高安大敎會へ預かつて頂く樣に成つたのであります。

然し私の母は嚴格故一錢の小遣もくれませぬ。十四歲の暮に着物と羽織を一枚づゝ送つてくれたのが始めでもあり終りでもありました。子供の事故時には小遣をねだつた事もありましたが、布敎で忙しくて脊中の子供に物も與へられぬ樣な氣の毒の人樣

から僅かな金を神樣に捧げ、上級の敎會へ埋をたてねばならぬ身の上で、一錢の金も自由に使ふ樣な事は出來ぬと手紙に書いては私に敎へて下さいました。私は時々ムラ〳〵した氣持の起きる時何時も此の手紙を出しては見たものでした。之が私の反省の第一歩でありました。

鹽を甜めて暮せ

今迄は大阪に奉公して主家の虐待や朋輩の迫害により逆境に在つた私も、大敎會に御世話に成りましてからは先づ食ふには不自由を感じなくなりました。然し自分の爲めに責任をもつて監督する人も有りません故小言を云ふて呉れる人もなければ賞めて呉れる人も無く、朝は寢放題起されるでも無く又僅かの使に一日を費したとて咎める者も無いと云ふ有樣でした。

故に段々と此の放縱生活に慣れて來れば又不足が出るもので、寢食に自由を得た私は更に物質に不足を感じて來たのであります。

他の者は親から自由に小使錢を送つて貰つて居りましても、私には一錢の小使錢も與へて呉れる者もないので、一足の下駄一つの帽子さへも自由に成らぬのが情なくなつて來たのです。

八尾町まで一里の道を帽子も冠らず一夏過した事もありました。

其樣な事で私の心は僻み、敎會生活の有難さは忘れて仕舞ひ、出來るだけズボラになつてやれと云ふ樣な調子になつてきて暇を作つては魚釣りや山遊びと十五歲の一年間は氣隨一杯で暮しました。

只時々此放縱になつて際限の無かつた私の腐つた精神を引き緊めて呉れるものは懇々と書いて送られた母の手紙でありました。

私は繰返しその手紙を讀みますと是れではならぬ、中川の子供だ、母の名を汚してはならぬ、傷ける樣な事はしてはならぬと熟々考へて仕舞ひ其れが一ヶ月位は緊張した氣持で續きますが、時間が經つと段々と緩んで來る。ソウと氣が附いても、何時の間にか氣隨の氣持に歸つて來るとは何と情けない事か、思へば思ふ程自分を誘惑するその力の方が强く、不知不識不良の方へ心が奪はれて仕舞ひ夜も落付いて寢ては居られぬ、土塀を越えても不良の交友と徹夜して遊んで見たい。詰らぬ唄も覺える。狂言もやつて見ると云ふ風に益々不良化したのであります。

處が十六歲の夏、不相變惡友と交際が止められませんので、自分乍ら情けないと心には思ひ乍ら誘惑に打ち克てぬのに煩悶して居た時、丁度八月の頃であつたでせう。村の旅所に御神輿を擔いだ連中が休憩して、村中では裸にて踊り過る。太鼓を叩く、大變の御祭り騷ぎをやつて居つて、私などは其の仲間入りをして居つたので、朝から夢中になつて騷ぎ廻つて居りましたが、さて擔ぎ上げるといふ瞬間、不思議にも擔ぎ棒に嵌まれて左の手の藥指と中指の二本が潰れて仕舞つたのでありました。(今でも左

手の此二本の指は不自由を感ずる事があります）

實に私は其時に愕然と目が覺めたのでありました。

私は天を仰ぎ地に伏して只今迄の心得違ひを神様に心から御詫を致しました。同時に母に對しても申譯がないといふ事に心附いたのであります。私は全く指の痛さに依り神様に救はれたのです。

私は熟々今迄の行爲の怖ろしさを感じまして、此二本の指の痛さにも耐へ、人一倍に働らいて他のものゝ模範とならうと決心し、又實際實行致しました。

然し是れは永續が出來ませんでした。是れでは成らぬ、自分の此體驗をもつて人を助ける方法を立てたいと考へまして、十七歳の春東京へ歸る事に定めました、然し其時はあちらにも五十錢、こちらにも一圓といふ風に九圓五十錢の負債がありましたのを、松村先生から拾圓貰つて漸くこれを支拂ひ初めて母の處で生活することゝなりました。

然し母の許に參りましたならば、色々自分の要求は聽いて呉れるだらうなどゝ勝手なことを思つて行きましたが、母は少しも許して呉れるどころが、アグラをかいても叱られる、煙草は取上げられる、ネルの腰卷が綺麗で勿體ないといふて襦袢の袖にして着せられた時は不足をいふて一時間も說敎をきかされました。其時の母の言葉に、

「私は東京へ來る途中簪を掏られ辨當の箸を簪の代りに一年半も使用した事があり、脊中の子供には粥さへ錄々たべさせられなかつた苦勞の道中もあつた」と順々とさとされ、お前は食事の時にお菜の不足をいふなどとは以ての外である。これから一年間鹽を甜めて暮せと申されたのであります。お前は他の者とは境遇が違つて居るとて一年間實際鹽を甜めさせられて暮しました。餘りのきびしさに私は此の母は若しや繼母ではないかと疑つた事さへありました。

その爲、私は益々粗暴と成り、此時代（郁文中學）には心が荒んでまいり亂暴はする、兄弟喧嘩はすると云ふ風でありましたから、母は又一層嚴格の度を增すと云ふ風

になつて居りました。

弟や妹にも喧嘩を賣りました爲め、妹もやたらに兄貴風を吹かすと云ふ風に、私を輕蔑して私の言ふ事を聽かなくなつて終つた。私は遂に鐵拳の制裁を加へました。其時の事であります。母は私に申しますのに「神樣の御館に居るお前は人の頭へ手をかけるなんて何と云ふ無慈悲者だ。兄弟ならまだしも他人の子であつたら其の親はどういふ氣持ちだ。子を持つ親の心と云ふものは我子が他所の人から燈蕊で頭を撲つたとてもそれを薪割棒で毆られた程にも思ふのが親の心である」と母にさとされ、可愛いゝ子供とお前を今日まで育てゝ來たが、お前の樣な無慈悲の者は、今日限り親子の緣を切るから出て行けと言はれて、母の立腹を買ひ親の手許に置いて頂く事が出來なく成りまして、已むを得ず十八、十九、二十の三年間は書生奉公に出されました。

京都へ行き如何かして身を起す樣にと毎日會社へ通つて居たのは其當時の事です。然し足に底豆が出來て切開しても亦再發し一週間も痛み續けては又腫れ上り、其樣の

事を繰返して居る中、遂に關節から切斷しなければ命に拘はる、切斷すれば不具者となる。此二つに一つの決心の立場に成つた私は、自分の不心得の爲め母へは出入を差し止められて居る現在の自分は全く絕對絕命だ。此際生命を投げ出すより外はないと決心して、再び醫者には賴らず御息の紙を足に卷いて、只管神樣に御詫びをすると同時に東京を向いて母に今迄の不孝を謝罪するうちに、不思議にも痛みが止り、四五日中に動く事が出來て、一ケ月程で全く回復しました。

佐津川氏が京都迄迎ひに來てくれ色々御諭しを受け上京することになり、本保支教會に厄介になることゝ成り、一年程お助けの研究をして今後道の爲、功を立てねばならぬと決心して、個人布教に志を立てたのが忘れもしない明治四十一年の十一月でありまして、月島の二號地へ布教させて頂くやうになつたのでした。

第二章　初期のお助け

滑稽な茶番の話

其頃月島は十一萬坪位で、戸數は合計四十戸位でありました。家は六疊に三疊の二間の二階借りで蒲團三枚と、火鉢一個で寒さを凌ぎ、湯錢にも困り錄々湯にも這入れず、炭一俵を求めるにも容易の事では無い。苦しい冬にも耐え、夏は所嫌はず草が生へ、然も身丈けほども延びるといふ荒地で、蚊に攻められるのが辛かつたが、一夏は蚊帳も買ふ事が出來ず、身體中黑くなる程蚊に攻められても辛棒して居りましたが、三十何ケ所とつぎの當つて居る古物の蚊帳を信徒が吊つて置いてくれたので、二夏振りでノビ〳〵と寢られてうれしさの餘り眠れなかつた事も記憶して居ります。此樣にして諸々の御助けと、東本參拜とで四十三年迄苦勞して通つて漸く四十三年の九月には宣教所を出願し、同年十一月に始めて月島の奉告祭を終りましたが未だ〳〵苦勞は是れだけでは濟みません。其の御祭りが終ると一週間目に彼の東京灣の海濤に襲はれ

まして、折角永年苦しんで出來た敎會も全部流されて、又其後の三年間は前と同じ苦しみを致しました。當時は布敎の時代でありました故、經營の困難が附き纏ひ、家主には家賃の催促を受ける其他言ひ樣のない苦難と闘ひましたが、私は敎會は潰れても上級へ運ぶ事を決心しまして、其翌年不思議の御守護にて、東海岸通りの眺望のよき場所へ移轉させて貰ひました。長い間世を怨み、世の中は手腕と方法で成功するものと考へて居た頃は物皆不如意でありましたが、自分を捨てた時に始めて自分が不思議に助かると云ふ事を沁々悟りました。病人でも自分を捨つる心となつて始めて不思議の助けが出來るものであると云ふ事を知りました。人は悲觀したり厭世したりして居ては決して思ひ通りに成らぬものであります。

讀者の皆さんでも自分は幸福だと考へれば難有いと思へるでしやう。又詰まらぬと不平不滿であつたら實際苦しくて耐へられますまい。困つた時其れを喜びに更へれば悲しいと思ふ事が喜びになるのです。其時には既に救はれて居るのではありません

か、詰らぬと考へれば不平が出る、不平が起れば誘惑の手に捉はれ易い。而してトン〳〵拍子に惡くなり、醒めた頃は既に奈落の底に陷ちた時で、どうする事も出來ぬ事に成つて仕舞ふ。罪を造つて罪の償ひが出來ないにも不拘、不平不滿で人を怨む樣なのは、つまり因緣に支配されて居るからであると思ひます。

修養の無い又は信仰の無い人が物質に惠まれ、思ふ樣に成つた時、それは精神の墮落した時であると云ふ事を忘れては成りません。與へられる物も少なく其中に喜んで安住して居ると云ふ事は救はれた事で、人を救ふと云ふ底力の顯れる時であります。立派に成人したと云はれる人でも不眞面目な生活が戀しくなると元の因緣に苦しめられて尊き生命さへ棒に振る人もあります。

丁度この頃であります。とても面白い話がありました。當時非常に勤勉家ではありますが、至極變つた人が敎會に居たのであります。姓は長谷川と申し、熱心な布敎師で毎日私達と一緒に日之寄進をさして貰つて居たのでありますが、とても大變な慌

て者で、普通に道を歩くのでも前へつんのめる様な歩き方をする人でした。座敷を歩くのでも矢鱈にせか〳〵と歩いて火鉢など目の前にあつても氣がつかずぶつかりさうになつては吃驚して飛び越してしまひ、火鉢の側に座つて居る人は側杖を食つて蹴倒される始末、火鉢なら未だしも參拜者が神様を拜んで居るのに行き當つて、びつくりして之れも飛び越すと云ふ慌て方でありました。或時は母が神様を拜んで居るのを飛び越した事さへありました。日之寄進の時などでも梯子に登るとて登る時には流石に一段々々登るのでありますが、降りる時は何時も慌てゝ足を踏み外し梯子から轉り落ちると云ふ滑稽な人でありました。面白い事には其の人の商賣が瀬戸物屋で、お客様があると直きに慌てゝ瀬戸物を破壞し、何時も損ばかりしてゐたと云ふことであります。所へ持つて來て其の人の顏は一面の靨でありまして、一寸凄い程で平らな所がなく穴ばかりであつたのであります。つまり少年時代に痘瘡に罹り、黑痘痕になつて居たのであります。よくもまあこんなに面白い事ばかり揃つた人があつたものと思ふの

でありますが、或日母はこの人を呼びまして「お前の様な慌て者ではいけない。暫らく落着いた仕事をさして貰ひなさい」と云つてこの人に拜殿のお茶番を命ぜられたのであります。斯くして神殿でお茶番を勤め、傍ら盛んに教理を研究して居りましたが段々せつかちと慌てがとれて參りまして、同時に不思議にもその黑痘痕も何時しか御守護を頂いて參り斑點の黑い色は薄くなり、窪んだ所は窪みが取れ段々と平らになつて來ると云ふ、それはそれは不思議な神様のお助けを頂かれたのであります。その爲に其の人は益々深く母に恩を感じて愈々眞劍の態度になつたのであります。私もこの先生とは始終衝突して母から叱られました。時にはこの人から磨いて貰つた事もありますが、丁度この時代は私も二十四歳でありまして、月島で常に眞劍に布教さして貰ひ朝は四時に起き教會の裏にあつた五百坪許り畠を作らして貰ひ、近所隣の肥を貰つてそれを腐らせて肥料とし、當時月島の私の教會に居りました三十人程の入込人の野菜を私一人で作らして貰つたのであります。朝二時間は畠の仕事を爲し其後朝のお勤

を濟ませて東本に運ばして貰ひ、一日東本で勤めさして貰つて晩の四時過ぎに月島に歸ると云ふ事が日課の様になつて居ました。さて東本では私は毎日々々何をしたかと申しますと、拜殿でお授けをさして貰ひ、お授けが暇な時には水打ち、拭き掃除と云ふ様に絶え間なくやらして貰つたのであります。然し斯様にすきなく働かして貰つても心は中々出來ないのでありました。自分がこんなに働いても他人が働かないのを見ると不足になる。自分が斯うして働くのに側の者は怠けて居る。怪しからんと云ふ様な不足不平の心がどうも出て來て困ります。然もその上に人の失敗、人のやり損ひなどがある時には極つてそのお小言を私が受けた。人間は自分がどんなに働いて居ても他人が働かぬと云つて不足不滿に思はなくなれば、心の出來た人で、人の失敗、人のしくじりの小言まで自分が喜んで受ける様になれば申分ないのであります。私も當時は中々不足不平が多かつた。其爲かどうか知りませんが年中胃腸が惡くてどつちかと云へば具合のよい日より具合の惡い日の方が多かつたのであります。年中溜飲の如き

痞へがあつて苦い水は出て來る、三日に一度は腸を毀すと云ふわけで全く閉口して居ました。一體私は自分の持前として氣短かで不足が多く恨みつぽかつた喜びと云ふものが少しもなかつたのであります。母はそれを見拔いて居ましたせいか、一日に一度は必ず私を呼んで叱るのであります。「人は働く許りが能ぢやない。その働きに喜びか伴はなかつたら何もならぬ。お前等不足々々で居るからいくら働いても効がない。だからお前は病氣で苦しまねばならぬ。喜んで働きさへすればもつと肥りもつと血色がよくなる。」と云はれるのであります。私も段々心にそのお小言が身に滲みて參りまして遂に私は東本の奉公人である、他の全部の人は皆私の目上の人ばかりであると思ふ様になつた。それで日常に處する覺悟も極つて段々心が愉快になり、氣短も不足もなくなつて來たのであります。斯様な氣持ちになると人間は何か自然々々喜びが增して來るものであります。私はそれからは胃腸がすつかり丈夫になつて參り、それ迄は十二貫しかなかつた私が段々肥つて參つたのであります。何時も母は長火鉢の前に座つて朝か

ら運んで來る信徒に眞劍の仕込をして居られたのでありますが、聞く者は皆感激してどんな重い病人も遠近を厭はず運んで參り、懇々と母の敎へを聞いたのでありますがその人達は又、次々に不思議な助けを頂き翌日又翌日と益々足を運ぶ樣になつて日增に參拜者はその數を加へて參つたのであります。

百萬圓出しても買えぬ大根

或日拜殿がひけて夜も十一時過ぎになつた頃、拜殿の一人の先生が非常な腹痛を起し苦しさに耐へず幾度か先生からお授けを頂きお諭しも頂かれたのでありますが、苦しみは增すばかりで一寸も苦痛の減ずる模樣さへ見えなかつたのであります。側の者も如何とも術の施し樣がなく仕樣事無しに、遂に役員が母の所へ相談に參つたのであります。所が意外にも母は「さうだらう。その位の御意見を頂くのはあたりまへだ。

私は病人の先程の仕打ちに對して夕方から一生懸命神樣にお詫びをして居たのだが矢張り神樣にお叱を受けたか」と暗然たる面持で申されたのであります。役員が「何事でございませう、どう云ふお詫びでございませう」といくら尋ねても「何事所ではない。病人を此處へ連れてお出でなさい」と云つて聞かれなかつた。役員始め一同如何なるお詫び、如何なる失敗があつて左樣に立腹されたのか更に判らなかつたのであります。所が母はその病人に「今日七十以上の老母で手足は垢で眞黑になり、頭は蓬の樣に亂れ、着る物とては印絆纏を身にまとひ、一本の杖を便りに漸くにしてお參りに來た方がありました。その人が水引をかけた一本の大根をお禮としていとも叮嚀に恭しく神前に獻上された。お前はその心も受けず、その大根一本を馬鹿にして臺所に投り出して置いたらう。私は部屋から見てゐたが何と云ふ情ない事をする。何と云ふ心なき業をすると思へば何とも神樣に對して申譯ない心で一杯であつた。あの大根には誠が籠つて居る。百萬圓出してもあの一本の大根は買へない。その尊い誠の籠つ

た大根をお前は一體どうしたと思ふ。さあ、これからあやまりに行つて來い。さもなければもうお前の樣なものは此處へ置く事は出來ない。」と云つて何としてもお許しが出ない。遂にその先生は意を決して痛む腹を抱へて夜の夜中東本の門をお詫びの爲に出たのであります。其の老母の居る家に辿り着いて見れば家と云つても名ばかりの六疊一間に七人も住んで居り、其の片隅三尺四方の板敷の上に破れ布團をひいて寢て居たのであります。先生も其處で心からのお詫びをされたのであります。その老母の申すことには「先生、私は實は永らく中氣で病んで居ましたが三年程前から教會の先生が降つても照つてもお助けに運んで下さいます。私も何とかして出來るだけのお禮をさして貰はねばならぬと一日も忘れた事がないのです。中氣と云ふ病氣の悲しさで手足が適はず、唯其の日〳〵の惠みに生きて居ります者、それにも拘はらず先生は愛想もつかさず三年間も運んで下さいました。近頃漸く身の自由を與へて頂ける樣になりもう何でもかでも神樣にお禮の心をお供へしなければと思ひました。御覽の通りの其

の日も凌ぎ兼ねる有樣でございます。先生に御相談申しました所、「何でもよい出來ぬ中から心一杯の眞實が籠つて居ればよい」と申されます。それを伺つて私も大變心が勇みまして、それからは動かぬ指を神樣に願ふて動かして貰ひ、百個ばかりのマッチ箱を一週間もかゝつて張り、漸く若干の金を得たのでございました。八百屋が通りましたので、何かお野菜でも神樣にと思ひまして八百屋さんに一錢の大根はありませんかと尋ねました所「馬鹿云つちや困る。そんな大根は無いよ」と叱られてしまひました。然しよく譯を話して賴みました所、八百屋さんも情心があつたとみえまして、そんならと云ふて捨て値で大根を賣つてくれました。それから近所近邊に賴み廻つて漸く半紙一枚と水引を求め、その大根に掛け五町の道を四時間もかゝつて杖を便りに痛い足を引きづつてお禮にお參りさして貰ひましたのです」老母の報恩の精神は矢張り神樣が御存じでありました。その眞實、誠の心を母が見たのであります。されば、こそ「今日老母が供へた大根一本に籠る誠の心は百萬圓を以ても買へない」と申されたのでありませう。

狐狸の住家を訪ねて

私もお助けに出る時には母の命令でよく九尺二間の共同長屋の様な所へ出さして貰つた事がありましたが、或日のこと矢張りいつもの如く母から共同長屋の汚い所へお助けに行くやうに命ぜられました。丁度其共同長屋を抜けやうとした所に門構への十間程もある家がありまして其處へやらして貰つたのでありますが、その家は今迄相當に暮して居りまして主人は中等學校教員、御家内は女學校の教員をして居られた。そう云ふ智識階級の常として最初は中々聞いて呉れなかつたのであります。所が先回申上ました中氣の老母に匂を掛けられまして、それではとお話を聞くことゝなりましたが、お助に行つて見るとその家はまるで化物屋敷の様で疊もなければ建具もない。皆賣り食ひしたり薪にしてしまつて廣い立派な家もまるで狐狸の住家かと思はれる程でありました。その中で三疊一間に夫婦がたつた二人で寢たり起きたりの哀れな日を

送つて居たのであります。

主人はもう一年半も肺で倒れた切りで寢起きすら不自由で一切人手を借りねば用がたりない。

又奥様はその御主人が病み付かれる四年前から矢張り肺病にかゝられ自分が全快すると同時に御主人が肺にかゝられたのであります。過去六年半相繼ぐ夫婦の病氣で總て使ひ果し、床板から、戸障子に至るまで藥代にすると云ふ様な有様でした。今日で丁度一週間位何も食べないと云ふ時教會の先生が行かれたのでありますが、先生も何か食べものを上げたり、又何か優しい言葉もかけてやりたいと思ひましたが、いや〳〵それではならぬ、それではほんとうに助かつて貰ふ事は出來ぬと、心を鬼にして段々神様のお話を取り次がして貰つた。その結果若い間に夫婦が好き勝手な道を通り親の云ふこと、人の云ふことは少しも聞かず、只勝手氣儘に通つて來たと云ふ懺悔も立ち、今後は決して世を恨んではならぬ、人も恨まず憎まず飽までもお詫の精神で通

らねばならぬと云ふことを自覺されて、お助けをいたゞかれたのであります。ところがお助けをいだゞかれると身體は動けぬながら大變樂になつたと云ふので、早速奥様は教會に御禮參りに行かうとされたが、腰卷一ッ、襦袢一ッ、しかも一週間も食を取らないと云ふ後なので、一錢の御賽錢すらない。然し神様は、どうせ、こうせとは仰せられない。たゞ眞劍の心を運べと仰せられる、お助けに行かれた先生も、何か援助しようかとも思はれたが、此處でそんな事をしては助からない。

遂に奥様は臺所の隅に、こはれかゝつた重箱があつたのを見付け出し、それを古道具屋に五錢で賣つたのであります。奥様もそれを夫の食物にしようか、それとも又神様の御恩に報ゆるしるしにさして貰はふかと、一時間餘りも思案されたのでありますが、結局これだけの重病人を樂にしていたゞいたと云ふ事はそれが例へ一時的のものであつても結構だ喜ばねばならぬと云ふ心になられ、その五錢を以て神様に御禮參りせられたのであります。

その奥様が教會から參拜を濟ませて歸つて見ると、驚いた事にはそれ程の大患であつた主人が嘘の様に御守護がいたゞけて、寢床の上に起きてすわつて居られたのであります。奥様は感激の餘り「あゝ貴方」と云はれた切り後は涙ばかりで、何とも言ふ事が出來なかつたのであります。

私がやらして貰つたのは丁度その翌日でありますが、丁度その日に不思議な事にはその病人の三十年來の友人が、勤め先の學校から無理に休暇を取つて、九州から態々訪ねて來たのであります。「一體これは如何したのか、こんな化物屋敷の様なところに居て、まるで人間の住居ではないじやないか……」と驚いたのですが、その友人もこの一家の一分始終を聞くにつけて、たゞ泣くばかりであつたのであります。その夫人はその友から漸く拾圓の金をかりて、當座のものを買ひ、又それを資本として翌日から納豆賣を始められたのであります。

教會の先生の言葉に從がつて心を低くして、その夫人は今迄思つた事もない納豆賣

を始められたのでありますが、元は相當の身分の方、如何としても納豆の賣聲が出ない。教會の先生が、その後から一緒に歩いて廻つて、「そんな事では、あなたは夫さんを見殺しになさるのか、しつかりなさい、そんなことでは駄目です」といさめながら共に納豆賣の手助けをなされたのでありますが、その先生の誠により、ようやく三日目頃から「納豆！　納豆!!」と云ふ賣聲も出て有難い事には毎日百本許りも賣れる程にならして貰ふことが出來るやうになつたのであります。

その夫婦は益々神様の御恩を感じて、利益の内から僅かづゝでも神様の御用に使はして貰ひ、日々喜びに滿ちた日を送つて居たのでありますが、その中病人もすつきり快くなるし三ヶ月の後には夫婦揃つて、御地場へ歸らして貰つたのであります。その方々も今では最も熱心なる布教師となつて居られ、多くの人々より稱讃を得られ、あがめられて居られるのであります。

人に負かされる勉強

大正二年の十一月私は結婚しました。それまで私は胃病で年中胃が惡く食べたものが思ふ樣にこなれない。始終溜飲で胸がやける、顏色はいつも惡い。私は十二貫二三百匁より肥つたことがない。何故そうであらうかといふと、それは自分は子供の時より親の膝下を離れてずつと孤獨で通つて來たのでありまして、家庭の溫か味といふものを知りません。それですから心は常に不平を抱き、目上に對しても反感ばかり持つて居りました。心に喜びがなく從つて元氣といふものが少しもないので身體が虛弱でありました。親の慈悲も自分に對しては薄い樣に思はれる、兄弟からも薄情にされる樣だ。親戚も爪彈きして居る樣だ、といふ風に思はれて世の中の同情は自分には少しもないと自分の不心得といふ事はすつかり忘れて仕舞ひすべてを恨んで居りました。

其頃にはどうも身體の工合が悪く、胃腸に故障がありまして、何時でも蒼白い顔をして身體がしつかりしませんでぐづ〳〵して居ると、猶更誰が見ても自分を厄介者扱ひにして居る樣な氣持がして、堪らなかつたのでした。それ故人に對しましてもいらざる憎まれ口をきいて、人を怒らせる、皮肉のことも言ひたくなる。兄弟に對しましても友達に對しても厭やがる樣な事ばかり言つて氣持を惡くさせる。殊に親に對しても表面は柔順の樣に見せかけても心の底に不平があるからすぐ親を怒らせて仕舞ふのです。自分は不平だらけですから稍もすればそれが顯れまして、他へ對して喜びを與へるといふ氣持ちにはどうしてもなれないのでありました。此樣に親兄弟始め人を苦しめて長い間通つて來た事に私が始めて氣が付きましたのが大正四年夏の事でありました。此頃はだん〳〵腸を惡く致しまして身體は痩衰へる。重湯すら思ふ樣に頂くことが出來なくなつて非常に苦しみました。其時人より死んだ氣になれといふことをよくきいて居るが、一ッ死んだ氣になつて見よふと考へたのであります。そうすると家

内がつく〳〵私に申しますのに「ほんとに貴郎といふ人の性質は六づかしい性質ですね、貴郎の樣な人は全く世間にあまりありません」と申しましたので私もハット心着いたのであります。それ迄は何かと言ふと屁理窟をつけて横車を押しては言ひ勝つて仕舞ふ。人に負けるといふ事は大嫌ひ。相撲をとつて負けると何十遍でもやり直して勝たなければ承知が出來ない。これが惡い所だと氣がついたのです。そこで母から人に負ける事を勉强しなければならんといふ事を聞かされました。そうした誡めをつく〳〵考へ合せ人に負ける事ばかりを勉强する樣になつたのであります。

私のお助け先で私と同じ樣な負けづ嫌ひの人がありました、或る日の事私はとう〳〵其人を理窟づめに致しました。すると先方も負けず嫌ひの人でありますからイキナリ鐵拳が飛んで來ました。然し有難い事にその瞬間に私はハット氣がつきました。それは人に負けることを考へついたので、イヽヤこの鐵拳の制裁は決して此人が私に加へるのではない。神樣が私を誡しめて下さつたのだ、申譯ない有難う御座いますと

いふ心に成つて、心の中でつく〴〵お詫びを致して居りました。先方ではその間に十二三も果てなく打つて參りましたが、打たれるまゝに反抗もしませんので手持無沙汰で手を引きました時先方にも私の心が傳つたのでせう。

「流石は宗教家だ、君に此樣な恥辱を與へてすまなかつた」と反對に先方では私に落涙して御辭儀をするのでした。そこで私もイヽヱこれは決して貴君に打たれたとは云ひません。私が神樣から誡めを受けたのであります。有難ふ御座います。と私が御禮を申しますと、其人は涙を流してつく〴〵あゝ私が惡かつた。私は今日からあなたの爲犧牲の精神となり、私も神樣の爲生涯を奉仕してお道を通りますと申しましたから私は否、それには及ばんだらう、君は社會のために成功する立派な人であるからどうか社會の爲めに働いて下さいと云つて別れました。其人はその夜から發熱致しまして遂に急性肺炎となり三日の後三十九度から四十度位の熱で苦しみました。其の當時其の人は私に向つて、私は貴君を打つた故に此樣の熱が出たと云はれましたので、

私はそれに答えてそれは私を打つた爲では決してありません。それは貴君の今まで使つて來た有りと凡る我が心が今御意見となつて現れたのですと申しました。其人は御意見以來ほんとの懺悔の生活に入り、立派な人となり私と苦樂を共にするといふ親密の間柄になりまして、永らく其の人と道を通らして頂いたことがありました。其後は私も非常に我の强い處に心付きまして、何とかして此御恩返しを致さうと思ひ始め自分の教會には片輪の人ばかりを置きました。跛足、中風、盲目、其他種々の不具廢人に等しい人をお助けすることに努めました處、不思議にも奇蹟的の御守護があつたのであります。此當時は私の教會では殆んど不具者のみでしたが、それがいづれも助かるのです。こうなつて來ますと又イロ〳〵私の我が出始めたのであります。私の教理を說く事が非常に嚴しくなり峻烈となり、一寸の隙も與へぬといふ風になりました。何も知らぬ始めて教理をきく人や老人婦人などは却つて怖をなし、參拜に來てもそつと玄關の戸をあけ、私の姿を見ると先生が居られるから小言を云はれるとい

けない。先生に不足を持合せてはいけないといつて歸つてしまふ。丁度其頃私は矢張り毎日親教會へ勸めさして頂いた頃でありましたが、或日のこと例の通り東京へ參りますと、突然母が私に向つて便所が穢れて居るではないか何故掃除をしないかと非常に嚴しく小言を言はれました。全然他人の小言を私が聞きましたので憤慨して仕舞ひ、人の代理の小言迄きくのはつまらないと思つたから堪りません。すぐサッサと月島の教會へ歸つて仕舞ひました。すると丁度其の夜私が豫てお助けをして居た心臟病の病人が神様に御禮に來て居りましたが、急に禮拜中に倒れて仕舞つたのでありました。

サアお醫者様だ注射だと大騒ぎに成り、私も又神様にお願して十時から五時迄八時間四十二回もお授けを取り次ぎましたが、とても助かりません。其時ハット氣が附いたのは今日母から小言を云はれ不足にして腹を立てた事でありました。そこで腹立つた事憤慨した事でも、親のためには自分はそこで犧牲にする、どんな小言でも無理で

も聞かねばならぬのにあゝ惡かつた。今後は何んでもきゝます。よろこんで受けさせて頂きます。必ず其氣になりませうと母にさからつたことをお詫びして、而して四十三回目にお授けを取次がして頂きましたら其れからフット氣が付きまして御守護に成つたのであります。此人は梅田千造と云ふ人でありまして、先年電車の中で逢ひましてお互の無事を喜ばして頂いた様な次第です。

里の仙人

御教祖は「里の仙人」と教えられたが、私も里の仙人にならうと考へてゐる。里とは人間のむらがり住む社會のことである。このやうな里に居て然も尙深山幽谷に霞を喰つて生きる仙人のやうに、どのやうな邪念妄執にも惑はされない、澄み切つた心になりたいと希がつてゐる。仙人にしては少々太り過ぎてゐるが、太つた仙人も一人位居てよろしいではないか。

第三章　道すがら

世間並の望みを捨てよ

凡て人間は信仰によつて神を認めた時はほんとうに神聖な氣になり、心がすつかり洗はれて仕舞ふ。汚い心を洗濯して綺麗な垢のつかぬ着物を着かへた時の氣持、或は湯に這入つた時の氣持になる事が出來るのであります。人間は自分の今まで考へて居た如きふしだらな考へを捨て去つて信仰生活に入れば全く湯には入つて垢を落した時の様なさつぱりした感がするのであります。又人間は規則的に生活を送るとどうしても窮窟を感じて自由を欲するのでありますが、しかし神様は我々に對して心の自由を許されてあるのでありますが、自分勝手の考へから人の心に沿はぬ様な事をするやうではいかんのであります。人間は我身すてゝも人の爲世の爲働かねばならぬ。かくて身の自由は初めて與へられるのであります。我身を中心とした自由、平たく云ふならば勝手と云ふ心が起つて來ますとどこへ行つても、どんな所へ居ても何事も思ふやう

にならぬ。思ふやうにならなくなると段々心が荒んで來て行動が粗暴になり亂暴になつて來るのであります。何か言へばベラボーと云ふやうな言葉を使ひ、物を動かすにも足で動かすと云ふやうになる。でありますから自分の心では眞面目である樣に思つても、言語動作が粗暴に陷つて居ないかよく反省せねばならない。

理窟で負けると腕力で行くなどゝ云ふが、これ等は最も劣等なもので下等動物に等しいものであります。下等動物は物を言つても判らない。判らないから直接行動に出たがる、人間もかうなつては動物と何等選ぶ所がないのであります。

人間はすべて反省といふことが大切であります。自分の惡い所はすぐに氣がつくと云ふ風になればその人はまさしく將來立派な者になると申してもよろしい。それが判らぬ人となるとどん〳〵わるくなる。人から何か注意を受けるとすぐに壓迫干渉を受ける如くに思つてやたらに反抗したくなつて來る。これではゐかん。あなた方は常に何かの目的があつて働いて居るのである。どうかして自分の希望を滿たし度いと思つ

て居る。しかし世間並の希望を滿し度いと云ふ心がとれぬ間は罪と犯罪は身邊に近づいてゐるのであります。正に誘惑に襲はれんとして居るのであります。年少の人は今は何も判らないでありませう。しかしこれが十年十五年さきになると自ら判つて來るのであります。親の金を盗んでそれを使つてしまつてから惡いと思つて居る。しかし之では何にもならぬ。信仰の力はその前に心が働いて自分がこんな事をすれば親はどう思ふか知ら、兄弟や親戚はどんな迷惑をするだらうかと、先づ親兄弟親戚などの心を思へ。さすれば誘惑の魔女が如何に誘ふとも罪を犯す前にグット引とめられるのであります。私もどうやら今日が日迄盗み一つしないで通つてきましたが、それは少年時代に植え付けられた信仰のせめてものお蔭であると信じて居ります。

通り返しの道

私の處の信徒に廿二歳になる氣狂ひの娘さんがあります。兄に當る人はもう相應の年輩で、元來非常な勤勉家で、よく家庭のために一心不亂我を忘れて働いて居るのに妹はかくの如く氣が變になつて正體がない。何故でありませうか。それは、彼らの父が過去に於て餘りに思ひ切つた道を通りし故息子は親兄弟の爲、苦しみ勵み働かねばならぬのであります。働いても働いてもなか〳〵思ふやうにならないので、その兄と言ふ人が私に相談に參りました。私は「それは、君が前世で親を苦しめた因縁である。思ひ切り苦しんで家庭のため犧牲になる事を喜びなさい」と申しましたところ、「自分は今迄一度も自分勝手の道を通つた事はない心算であるが、絶えず事情に惱まされ苦しまされるのは、これは全く自分の因縁より他なし」と悟つて、神に一心に御詫びをすると、不思議にも妹の病はズーッと御守護を頂いたのであります。

人は自分の思ひ通り目的を遂げるため、東奔西走してゐる時は、恰も氣狂同樣であつて、恥も外聞もないものであります。例へば、石にかじりついても金儲けがしたいと考へる。金を得る爲だつたら手段を撰ばない。他人にどんな迷惑がかゝらうと介はない。こう云ふのは本當の意味に於ける一すじ心ではないのであります。一すじ心とは誠の心であらねばならぬ。人に迷惑をかけておいて、恬然として顧みる所がなく、何の誠の心でありませう。だからして、何でもかんでも盲目的に押し通すと言ふ事は非常な罪惡なのであります。目的の爲に手段を選ばないで、ガムシャラの道を通つた人は必ず通り返しの道が恐ろしい因縁となつて現れて來るのであります。何事をなすにもよく〳〵氣をつけ通り返しの道を現さぬやう心掛けねばなりません。

娘さんに一言す

近頃は、時世が進んだ故か、女でさへあれば猫も杓子も女學校に入れたがる。爲に巷は制服の處女が氾濫してゐる。さやうに女學生の多くなつた事は誠に結構でございます。ところが女學校を出たお嬢さん方は、不思議に飯焚きが出來ないのでありまして、實際上役に立たん事夥しいのであります。箒も雑巾もモダンガールは御米もタカンガールであります。女學生の悉くがそうだと言ふのではありません。中には結構な良妻賢母型の人も多々ゐられる。しかしまあ全體の傾向として、どうも私は心服の出來ない點があります。

ところが、例へ女學校には上らずとも、幼少の頃から苦勞してゐる娘さんは、心の配り方が本當に行き屆いてゐるし、身體のこなし方動きと言つたやうなものに隙がない。更にそう言ふ人が日々神様にもたれて、信仰の生活を送つてゐられる方であると

したらつゝましやかで、床しい眞の大和撫子と申し上げたいのであります。彼の近江聖人の奥様は、聖人に嫁ぐ以前は村中で一番醜い、いはゆるうばすて山組の女性であつた。それが聖人の妻となつてからと言ふものは、聖人の妻として恥づかしくないやう一生懸命身を修め、心を練磨して夫の人格を傷けないやうな立派な奥様となられたのであります。

容貌もさる事ながら、みめかたちばかりが女の全部では決してないのであります。女の生命は心根の優しさにあるのであります。一切の主張を絶つてハイハイと夫に侍く女性を見るとき、私は限りなく美しい氣持ち、限りなくいとほしい感情を抱かざるを得ないのであります。このすなほな心こそ、えりいでゝ女性には大切なものでありませう。なべての娘さんの持つてゐる尊い生命は、誠に、絶對的すなほな心であります。

憎まれ子世に憚る

『まけば生へまかねば生へぬよしあしは、人はしらねど種子は正直』

といふ道歌がある。それが所請因縁である。因縁が引くのである。盗人の下心のあるものに『オイ盗まふ』と誘はれてその淵へ落ち込むのは、其人が悪因縁の持ち主である。人が見て居ぬと自分のものにして仕舞ふ。それも一度か二度で摑まるといふことは非常に幸福で、そこで改めれば誠に幸福なのであります。悪因縁のために、盗人根性の者がだん〳〵大膽になると刑務所の方がよくなり、却つて實社會がつまらなくなる。親兄弟に遠ざけられる様に邪推して來て日々の行爲が他人からかまつてくれない様な結果となり、『憎まれ子世に憚る』で、求めて邪魔にされる様にするが、あれは人が嫌ふのではなくて自分が嫌はれて居るときめて仕舞ふのである。たとへば、猛獣や狂人には側に人が近づかぬと同じ様に自分そのものが根本より間違つてゐるのであり

ます。悪い事としりながら、人に知れぬうちはよからうと二度三度繰返すのを悪因縁といひ、これは必ず孫子の代まで傳はつてゆくのであります。そういふ人は不自由はなくても盗みたくなる、貧乏故に盗むのではない。僕は布教中絶食までした事があるが、決して掻拂ひもしなかつた。泥棒は天性で、因縁である。やらうと思つても、因縁のない者にはやれないものであります。世間にはよく、寸時のたのしみのため妻子を捨てるといふ事がよくある。かくて圓満なるべき家庭は破壞され、恐るべき因縁の種は孫子の代迄まかれるのである。因縁をこさえるのは人の精でもなければ境遇とか誘惑とかいふものでは決してありません。魚心あれば水心がある。こういふものがあるかと餌を見せられると、すぐバクック。而して釣られてしまふ。如何に餓じくともノタレ死しても其處で食ひとめなければならぬ。それが出來るのが即ち信仰であります。

眞實偉い人とは

兎角、目先きの慾にのみ捉はれては、肝心要が抜けるものである。眞實誠の心を働かすと言ふ事は信仰のない者には出來ない事であります。又お道の働き者と云ふのは人の眼につく所ばかりでガチガチ働いてゐるやうではゐけない。人の出來ないところ迄、進んでまめ〳〵しくいそ〳〵と働かねばなりません。そうなると下駄の履き方一ツでも、どことなく人を引きつける人間的魅力が自ら備はつて來るものであります。それが德と言ふものでありまして、人が德を慕ふと言ふのはそこであります。人は働いて金を得、地位名聞を得たゞけでは成功とは言へない。自分と言ふ人間が本當に錬え上つてゐなかつたら、どのやうに金を得ても名聲を獲得しても眞實の意味に於て偉いとは言へません。

日本の大山元帥や乃木將軍は、軍人としては位人臣を極めた偉い方であつた。しか

し、その私生活に於ては軍務の餘暇をみては、百姓生活をされて居たと言ふ事は有名な話であります。又獨逸で有名な棊將軍は奉公人の靴の廢物を利用して農場へ出て農業の經營に携はれたと言ふ事も聞いて居ります。劍をとるばかりが眞の勝利を得る軍人ではないのであります。例へば布教師の方にしても、私は布教師であるからお取りつぎさへすればいゝのであると言ふやうな考へでは考へ方が狹いと申さねばならぬすべからく布教する方でも、日常茶飯事、一擧手一投足に到るこまかい點迄信仰に滿ち滿ちた氣持ちで夢ないがしろにしてはならない。斷へず人間を練り、人格を創つて行くやう心掛けるべきでありませう。

歡喜の花束

人がどん底に陷つて塗炭の苦しみにあがいてゐる場合、一片の俠氣止むべくもなく助けるのも、もちろん結構、或ひは同情の心禁じ難く救ひの手をのばすのもよろしい。しかし見るも因縁聞くも因縁なりとして、理の上から當然救ふてあげねばならぬと自覺したとき、神は歡喜の花束を下されるであらう。誠のお助とは即ち是れであらう。

第四章　大節を通りて

死線を越える

私が昭和八年の盛夏八月の九日より癰が脊中に出來て、傷口の長さ一尺一寸五分、その上に茶呑茶碗を四ケかぶせた様な腫物の山が出來九十日間と云ふものはうつむいたきりでどの方向にも動けず寢たまゝ日夜苦痛と戰ひ、二十一貫の體重も拾貫まで減り、今は此の通り元々通り太らして貰つて居りますが、腕は元の半分、足の肉は骨が邪魔ッケでそれ以上痩せられず、皮がダラントぶら下つて殆ど血の氣が無かつたのであります。

そして二十五日間は四十度以上の熱が連續的に襲ひ來り、一日に何回も脈が結滯しました。もう駄目だ、助からないと云ふ所まで行つたが、神様はもう一度何か役に立たせたいと思召してか、此の様に助けて頂いたのであります。

五十日間と云ふものは病は少しも快方に進まず、益々昂じる許り、他の病と違ひ、

晝と云はず夜と云はず、ブツ通しの痛み苦みはとてもお話にならん有様です。

毎日脊中の膿を絞るのにガーゼ脱脂綿が大きなバケツに山盛、六反位のガーゼは思ふ間に無くなつて仕舞ひます。

醫者はよくこんなひどい致命的な腫物が助かつたと驚異的な口調で話されました。

此の御意見に就てのお詫は勿論自分の一本調子の持前にあるのだと思つて居りましたが、そのお詫を幾重にも神に願つたが、依然御守護を頂けず、益々病は惡くなる許りでした。

所が是は全く單なる個人のみの御手入でなく、もつともつと大きな分離と云ふお報らせにあつたのでした。そして高安と分離の運びが付くと同時に、腫物の口があき膿が引切り無しに流れ、痛みも漸くにして減退して來たのであります。

十月一日傷の長さ七寸五分、幅五寸五分の池が出來て、中は眞赤な肉の塊、そしてだん〳〵表皮が上へ〳〵と被つて、今では大さ一寸程になりました。

病中私は心を倒さず只神一條、御禮一方に心を傾け、何一つ心配せず時機に在せて苦みをこらへてゐました。

私からこう言ふのは甚だ變でありますが、醫者はよく是まで忍耐して來た。是も皆貴君の信仰の力、信念の賜だと感嘆措く所を知らなかつたのであります。

その先生は或る大學の講師で時々學生に、私の九死に一生を得た事柄を參考資料としてお話しになつたと聞きまして全く恐縮して終ひました。私の病中ある人々の噂を聞き、直接に私に忠告なされる方がありました。それは六踏園の事業が惡い、あんな事に澤山の金を掛ける必要がない等と頻りに六踏園事業を攻擊致しましたが、私も皆様に御話した通り調布に農場を造り、溫室を擴張しました時、恰も四十年祭當時、大和に夏休みで出掛けた和子が腸チフスで殆んど九死一生家内の伯父からは、六踏園が惡いのだ、六踏園を止めねば承知しない、子供が死んで仕舞ふぞと云ふ強いお言葉でしたが、私は却つて子供一人を犧牲にしても此の事業は止めんと云ふ固い決心、固

い心定めを致しましたが、その決心をきめた爲、和子は危い命を助かつたのであります。

次に私と、富子と聰佐がやはりひどいお手入れを頂いた時、それは丁度大島農場開發の當時で、以前と同じ心定めして助けて頂いたのでした。此の度の私の病氣に就て考へて見ると、自分の一本調子の頑固な性質、一日二十四時間の中、二十時間朝から晩まで働く主義で勤めましたが、それは自分一人が働くのみで大勢の人を働かす事は出來ない、自分はジッとしてゐても、大勢の人に思ふ樣に働いて貰はなければなりません、世の中には朝から晩までガチ〳〵働いてゐる人がありますが、それは自分一人の働であつて、大勢の人を喜びをもつて、働かす事は出來ません。そう云ふ人の勤は缺陷だらけ、ぬかりだらけであります。

主人は一本調子で一日ガミ〳〵云つて小僧、女中を叱り飛ばす、そして家族の人には鬼の樣に思はれてる。そして一寸でも居なくなると鬼の居ない中と許り蔭にまわり

いろ〳〵隙を見て怠ける。これでは却つて他の人に弛を與へ、人に罪を造らして仕舞ふ樣なものであります。

寶の持腐れ

私は神の許す限り、その仕事が正しい限り、何んな仕事でも當人の好きな道に延ばしてやらねばならぬと考へてゐるのであります。自分の子供には子供の好きな仕事をさせてやり、好きな道を歩まし、道で行く者は唯、一人あればよいと思ふのであります。そして色々な方面に出て、思ふ樣にならなければ、因緣を自覺して、お道一條にふんばればよいといふのが私の主義であります。

親が眞實誠で働いて居れば、例へ子が世間で好き勝手な仕事をやつたとしても、失敗に失敗を重ね終には神が一筋に道に引き出さして下さる事と信じて居ります。

身は一介の勞働者でも、精神一つが道の上に繋がつて居れば、必ずや神はその人の前途を護つて下さるのであります。

神は適材、適所と仰せられ、心素直になれば、その人の適宜に仕事を與へて下さいます。

如何なる自分に資格がありても、其の力を現はして行く丈けの德がなければその資格は實を待たずして、寶の持腐れとなつて仕舞ふのであります。

學校で法學を學び、法學士で卒業しても區役所の人夫の監督、土方の監督、電車の車掌、自動車の運轉手等になつてゐる人が澤山あります。

親の德によつて折角資格は與へて頂いたが、心が常に神の意志にかなはず不滿足で通つてゐるため、折角の德をけづり、その學問を利用する事が出來ず、いつかな活社會に芽を出す事も得ず、土に埋れて行く人が多々ある。全部がそうであると、俄かに斷定は致しませんが、一體そう云ふ人達は學問を遊びと心得てやつたのではないか。

苦しみを克服しつゝやつた學問でなければゐけない。大學を卒てもカラキシ役に立たない人があるが、こう云ふ人は必ずや學問を遊びに考へていゝ加減に片附けてゐた人に違ひないのであります。死んだ學問とはそれでありませう。折角學德を磨かうと思ふならば、活世間に實際に、自分のやつた學問を活かして使ふと云ふ心懸けがなければゐけない。長年にわたつて巨額の教育費を使ひ、あげくの果てに役に立たん人間が出來上つたとしてご覽なさい。一體何の面目あつて親に會はせる顏があるのでせう。第一世間樣に對して相濟まないではないか。國家の穀つぶしとは、豈ひとりルンペンのみならんやであります。又親から良い仕事を授けて貰つても、それを續けて行く事が出來ず、溫厚しくして居れば、親の溫い懷で樂しく愉快に暮せるのに、親を中心に考へず、我儘、氣儘であらゆる惡因緣を製造して仕舞ふ。こう云ふ鹽梅で德のない者はまことに悲しいもので、例へ幸運にブツかつてゐても、その幸運をわがものに領有する事が出來ずして、道端に生え出でた名もなき雜草のやうに花咲く時も實のる時

もなく、あはれな生涯を果へるのであります。

折角の寶を持腐れにしないやう、あく迄も寶は寶として磨き活用して行くやうせなければゐけないと思ふのであります。

犬信心では駄目

お互ひに廿歳前後の時代には何かしら心に煩悶を求めてるのであります。ですからお互ひは何か眼どうとするものがなかつたならば如何なる方面に誘惑されるかも解りません。近頃の言葉に『何が彼女をそうさせたか』と言ふ言葉があります。之に依ると皆、自分の周圍環境が悪いから斯の様に墮落したのだと世を恨み、人を憎むが、決して世の中がそうさせたのではない、道から是を考へ、因縁一條の心を悟つたならば決して他に心を引かれ墮落の淵へ落ちて行く様な事はないのであります。

又同じ因縁の心の持主同志がお互ひに引き寄せられ、同じ境遇を辿つてゐると言ふのは何故で御座ゐませうか。年中夫婦喧嘩をして仲が悪いのに、別れたら良さそうなものを腐れ縁でどうしても別れる事が出來ない。

遁れ様として遁れられん、悪いと思ひ乍ら、思ひ切れん、してはならん事とは知り乍ら又々罪の上塗をして仕舞ふ様な事は全く自分の意志の薄弱さ、切つても切れぬ悪因縁の然らしむる所であります。心の改良の出來ぬ限り、一生涯、悶え惱み、苦しみ通らねばならんのであります。

色情の強い人は止めんとしても、やはりその場に來ると誘惑に負けて仕舞ふ。お酒の好きな人は酒屋の前まで來ると、どうしても先に進む事が出來なくなり、遂にそこで因縁を出して仕舞ふ。お互ひ居ながらにして因縁を斷ち切る事が道の力であります。又信心に致しましても犬信心と言ふ言葉がありますが、犬信心とは自分の思つた通り眞先に進めない。一町の道を行くにもアッチの露路によつたり、こつちの軒下に

止まつたりして、十分で行ける所も二十分も三十分も掛り無駄道を踏んで行く。

人の一生も懺悔の生活で通らして頂き、犬信心の様に人の家の台所の匂を嗅いだり電柱に小便をしつかけたり何遍も失敗を繰り返さず、日々心を反省し、無駄道を踏まず、正しい方面、眞面目な道に向つて行かねばなりません。

金の欲しい時分に金を見せられる。着物の欲しい時分に着物を見せつけられるが、どんなに因縁のお試しに合つても、それを斷ち切つて行くのが所謂信仰の力であります。怠け者は如何に働けと言つても、怠けてる方が樂であるからどうしても勤め働く事は出來ない。

三年間も修養して眞面目な道を歩んで來たが、一寸の因縁のため僅か五分間で今までの努力が、水泡に歸し、破壞されて仕舞ふのであります。ですから自分は常に神を認め、神は一切を見拔いて下さる。神は何時も自分を監督して下さると言ふ心になれば、世の中に犯罪といふものは起らないのであります。又顏は心の遊び所と申しまして貴女方がどんな事を考へてるかチャンと顏に書いてある。私は信仰の力で皆樣方がどんな事を思つてるか當てゝ見る事が出來る。嘘だと思つたら一人々々並べて試みに銘々の心を指摘してお見せしてもよろしい。人間の精神が變れば顏色に現はれて來る不足を止めると頰の肉がフクランで來る、不足の多い、愚痴つぽい人は頰の肉がコケて貧相である。皆は長い間、襤褸を繫いでくれ、骨を折つて呉れたが、その仕事をして、不足してる間は自分の心が襤褸である證據である。

この冬は風邪が流行して、皆樣の大部分が風邪を引いた相ですが、風邪は心の行詰りと云ひ、皆が何か良からぬ相談をしてるから神がお知せ下さつたのであります。

神は二度、三度は許すが、それが度重さなると身上に御意見を下さる。それでも解らぬと終にはお引上げと言ふ事になつて仕舞ふのであります。然し眞の奥底より心を立て替え、改良する心になれば又神はもう一度使つてやらうと助けて下さるのであります。

苦しかりきあの頃

御互ひに世の中に生存して行く以上、自分の住んでゐる世界の事を十分に知らねばなりません。私は子供の時、居ながらにして世界中の事柄を知りたいと云ふ希望を抱いて居りました。誠に當時としては大それた望みであつた譯です。然し乍ら人智の進展は恐ろしいもので、居ながらにして實社會の出來事が私達の耳朶をうつやうになりました。私の幼少の頃の大それた望みの一半は文明の利器ラヂオに依つて實現された譯であります。

成程、出來上つて仕舞へば便利なものだ位には考へる。併し毎日ラヂオを掛けつ放しにしておくと喧くて、便利もへちまもあつたものではない。人間馴れると誠に我が儘なものであります。

だが併し今でこそさうでありますが、此の様に機械文明が今日の隆盛に到る迄には

容易ならぬ人間の苦心があつたのであります。人間は何事をなすにも苦い經驗を嘗めねばならない。その結果として初めて大なる收獲があるのであります。

苦い經驗と云へば私に想ひ出があります。子供の折私は或家に奉公に參りました。その家の主人と云ふのは變屈で意氣惡で、二言目にはがなり散らすへそ曲りでした。

私は朝から晩迄猫に睨まれた鼠の様に、脅へおのゝいて居りました。その家には丁度私と同じ年輩の子供がおりまして、共に尋常の一年生でありました。同じ様に毎朝學校に行くのでありますが、私が家を出るのは主人の子供より一時間も一時間半も遲れるのが常でありました。斯う云ふ有様ですから、遲刻が續きました。何故遲刻せねばならないかと申しますと、朝學校に行く前には必ず飯炊きやおしめの洗濯をやらねばならないからであります。學校が何時に初まらうと遠慮會釋なくこき使ふのでありました。之れでは遲刻しないのが不思議な位で、遲刻をするのは當然の事でありまし

た。子供心に主人の子供と我身の不遇を比較しては、口惜し涙に深夜秘に涙した事も一再ではありませんでした。それにもつと不可ない事は、主人の亂暴が言語に絶してゐる事です。一寸した事で私はよくなぐられました。馬鹿野郎と云つては心張棒でガンとやられる。いつも頭はコブだらけで身體中は傷の絶えた事はありませんでした。

この樣な悲慘は樂しかるべき學校に於て更に止むべくもなく度を加へられるのでした。何と言つても來る日も來る日も遲刻するのでありますから、學校の先生に對して好からう筈がありません。怠け者と罵られ、大きい丼に水を一ぱい入れられて教室に立たされるのであります。何の事情も知らぬ學友は遂に私を怠け者として一せいにあざ笑ひ、糾彈するのでした。私は取りつく島もなく、全く身も世もあらぬ思ひでありました。斯うした言ふ可からざる苦勞の中にあつて、私はそれでも一生懸命に勉强致したのでありました。この私の努力は漸く認められて遂に副級長に任ぜられる榮冠を得ました。

それにひきかえ主人の子供は遺憾ながら成績頗る香しくなく、甲は一つ後は乙と丙と云ふ體たらくであります。學用品なども主人の子供の使ひ古しやお殘りで滿足なものは一つだつて使用した事はありませんでした。一枚の半紙すら自由に出來なかつたのであります。

こうした中にあつて兎も角、頭角を現はし得たのでありますから自ら、秘かに慰むる處がありました。

それは或る日の事でした。例に依つて私が主人の家の前の川で、赤坊のおしめをセッセと洗つて居る所に丁度校長先生が通り合はされ、私の姿を發見されたのであります。此の時初めて私の遲刻の理由が釋然と解けたのであります。『君は實に氣の毒な人だ。然し君は將來必ず立派な人間になるぞ』と手を取らんばかりにして賞讃して下さいました。然し私の折角の辛苦艱難も中途挫折の止むなきに到りました。未だ私は八歳の幼年で因緣の自覺が出來なかつたのでありませう。遂に苦痛に堪え得ずして主家

より脱走を企て叔父の家に逃げ込んだのであります。斯うした有爲天變の間に懷しの父母が、久濶振りに歸つて來られた。私の心は躍り立ちました。久し振りの親子の對面にやれ嬉しやと思ふたのもほんの束の間で、戀しい父母の膝下で一夜のうまいも出來ず、父母は再び地方へ旅立つたのでありました。私は天を仰ぎ地に伏して身の不遇を嘶つのでありました。あれやこれやを思ひ返すと全く枚擧に遑がありません。併しこの苦勞この辛苦があつたればこそ私は今日を成したのであります。それを思ふと苦勞の體驗はむしろ樂しい思ひ出として私の腦裏に浮び出るのであります。

現今では御道の上で十萬の信徒を頂きまして東本の信徒が各地に散在して種々なる事業に携はつてゐる爲に、居ながらにして世界の情報を知る事が出來ます。南洋でも佛蘭西でも米國でも、夫々の關係筋の人が行つてゐるので色々の事を知る事が出來ます。之はラヂオ程早くはないが、ラヂオより遙かに詳しいのであります。斯うなると人を養はして頂いた有難さがつくづく解るのであります。

附　錄

子は親の鏡

人と云ふものは一日に幾度となく反省して頂かねばならぬ。それでなくては道がつかないのであります。道を求めるには、自ら罪を犯して自らその報ひを恐れるやうではいけない。それは精神の墮落である。

お道の人は不絶反省して行かねばならぬ。反省とは自分の精神を顧る事である。三歳の幼兒すらよく吾々精神のよし惡しを知つてゐるのである。それと云ふのは卽ち信仰が幼心にもはや芽榮えて來てゐるからなのであります。三歳の幼兒にして尙且然り、增して況んや浮き世の辛苦をなめて來た大人に信仰の心のなからう筈はない。卽ち信仰の氣持ちを抱いて自分の行ひを反省せよと云ふのであります。本當に反省の出來る人は恐らく信仰の力を體驗した人であると云はなければならないのであります。

私の敎會は甚だ小さいのでありますが、それでも約ザアット三百人ばかりの人が起

きふしを共にしてゐるのであります。就中子供は約半數百五十人もゐませう。こうしたかなり大部の數の家族が毎日を送らして頂いてゐるのでありますが、ちよつとも喧嘩をしない。何故であるか。それは親兄弟になじみ、理の親になじむでゐるからである。恰も小家族が相寄り相集つて、一大家族を形造つてゐるかのやうな觀を呈してゐる。こうした一家團欒の間に子供の保護事業が知らず〳〵出來てゐるのである。又お道の精神を暮しの精神だと固く信じて行く處に子供の感化も自らなされてゐるのであります。さればこそ喧嘩がない。いまはしい事が起りよう筈がないのであります。日本と云ふ一大家族を治めて行くにも亦此の行き方此の精神でなければならんと私は思ふ。

人間と云ふものはよく發作的に惡事を犯す。こう云ふ人は惡因緣の人である。お道の人が例へ一瞬の間と云へどもお道を忘れたときは犯罪を犯したと云はねばならぬ。これとて惡因緣の人と雖も變る事はない。朝から晩迄神樣を忘れないで行かれる人は

救はれた人である。眞に終始一貫する人である。誠意のある人である。こう云ふ人は少しばかりのほこりがあつても、神人共に許して呉れる。之が人の德である。

私の最も悅びとする處は、一つの實行をさして頂いたときであります。お守護を考へさして頂いたときであります。この悅びを時間的に永續する事の出來る人こそ眞の善人でありませう。

私の小さいときを考へると今でも些か恥ずかしくなる事がある。私がよそに連れて行かれると無暗に恥ずかしがつて赤くなり、云ふ事も云へんでモヂ〳〵したものである。たまにしやべれば相手を憤らせるやうな事を云ふ。之では一體どうなる事かと自他共に心配の種をまいたものである。しかし乍ら專心お道を勵まして頂く間にどうやらこうやら御覽の通りの人間になつた。

只今私は專心と申しました。何でもひたぶるに專心にやる。これは非常に大切な事である。例へ未經驗の仕事であつても、この專心なひとすじ心さへあれば必ず專門

家以上になる。要は熱心にある。經驗がないからやれんなぞと弱音を吹くやうじや生涯役に立たん人である。人生とは一寸先きは暗である。一時間後十分後にどんな事が吾身にふりかゝるか解らないのである。人あつて云ふ「君どこそこに行つて呉れ給え」と。此の場合「行つた事ありませんから」とて斷る事が出來るか。それをしも經驗がないと云つて拒絶する理由たり得るか。人生にそんなに經驗のある事ばかり來るものではないのである。

一體苦勞をしたと云ふ事は、未經驗の事柄を澤山經驗した人であると云ふべきだらう。卽ち偉くなる人は人のしない苦勞を澤山した人である。多くの未經驗を經驗した人なのである。だからして未經驗の只中に捨て身になつて敢然ぶつかつて行く位ひの氣慨がなくちやいかない。

こうした數多の經驗を突破して親が相當の地位と財物を贏ち得るに到る。事こゝに到つて初めて吾子の教育について考ふるやうになる。さてこそ「あゝもしちやいかんこ

うもしちやゐかん」とおつぱぢめる。教育なるものはそのやうな思ひ付きな方針で出來るものではないのである。

親の今迄通つて來た道こそ子供の字引でなければならぬ。例へいかに懇々と說諭してみても口先ばかりでは効果がない。親の道筋こそ子供の道でなければならぬ。子が惡い事をやる。カツパライをやる。それは子が惡いのではない。子がカツパライをやるのではない。親の通つた道がその子において現はされるのである。西洋の學者が、「子は親の鏡だ」と云つたが誠に最もである。

かくて子と親は一緒の身體である。親子一體であらねばならぬ。だからして親は子の氣持ちになり切り、恰も吾が友の如く話し會ふ。ひとり親子の關係のみならず夫婦も然りである。家內がグズ〳〵云ふ。自分が惡いからである。自分の心の中の掃捨がちやんと出來れば、妻君は必ずグズ〳〵云ふ事を止める。

互ひ立て合ひ助け合ひと云ふのはかうしてお互ひの心と心を洗ひ合ふ事なのであり

ます。斯うして心の掃捨がすつかり出來上つたとき始めて他人のほこりを掃捨する底力が出來て來るのである。こうなればもはや千人萬人と云へども相手にして仕事が出來るやうになるのである。兎もすれば通りそこなう道を見透して善惡黑白を極めて自覺なし到達する境地。こゝがこの世の極樂じやと云ふのはその人を中心として何でもなし得ざる事なしと云ふ世界を指したのである。又助け一條とは病人を助けるばかりではない。人をあらゆる方面から助けさして頂く事をも意味するのである。

近時就職難の聲は巷にかまびすしい。世は擧げて生活の危險におびやかされてゐます。然し之は生活の危險ではない。私に云はしむれば精神の危險である。くらしの不安ではなくて心の不安にある。その人の心の掃捨が出來ないからなのである。心の掃捨が出來れば必ず口は出來る。前途に道の開けないのは自分の心に道がつかんからである。

既に前章でも述べた如く、私の病中は危險が續いた。脈は刻々に高まる。四十度の

高熱が二十日も續く。誠に氣息奄々の狀態に陷つた。數多の醫者は生きてゐるのが不思議だと言つた。間斷なく數ケ月間と云ふものは神にお叱りを頂いた。この間私の將來に對する方針が立つたのであります。こゝで心を立て直してぐんぐん仕事をやつつけて行かねばならぬ。一つの道がつけば必ず二つも三つもの道が自ら開けて來る。

道の行きづまると云ふ事は人の生を得てゐる間にあらう筈はない。どうぞ皆さんも專心な精神でお如才もない事でせうが御國の爲社會の爲盡して頂き度いと思ひます。

アリアリと見える神

人間は常に苦しい仕事を遁れて樂な仕事をのみ撰むやうでは仕樣がありません。そふ言ふ人は精神の墮落した人であります。物事が總てトン〳〵拍子に行けば誠に面白いものでありますが、人生中中にそふ云ふ譯には參りませぬ。一ッの道を成し遂げる

には必ず障害が起るものであります。然し如何に障害が現れやうとも、その障害に負かされるやうではゐけません。解決が出來んからと云つて、やらぬ先に最う氣を腐らして終ふやうでは役に立たん。「事の成らざるは、成らざるにあらずして成さゞるなりと」と諺言にもある通りであります。

道の者は、どんな苦しい事、どんな悲しい事が起りましても、自若として動ぜず、それを樂しみと喜びに變えて解釋して行くやうでなければゐけません。そうするにはあらゆる苦難の仕事を何糞とばかり頭から呑んでかゝらねばいけない。その位ひに精神が廣く餘裕しやく〳〵の態度であり得れば、苦難は平氣で切拔け得られるのであります。

艱難至れば敢然と身を挺してそれと戰ふ、こゝに云ひ知れぬ樂しい氣持ちが沸々と胸底から湧いて來るのであります。

私など、一つの仕事が滿足すれば良いやうなものですが、無理に二重三重もの色々

の仕事をさして頂き年中求めて苦しんでゐるのであります。斯ふして絶えず苦しみを續けてゐる間に所謂不思議な助け、普通の人の得られない力を授けて頂くのであります。切端つまつた苦痛苦悶の中に今迄に見出し得なかつた眞實が發見され、その眞實を據り所として新しき實行が生れて來るのであります。

自分の誠一條、眞劍の精神で以て果して何處迄仕事が果されるか。そこに理が如何樣に働くか。その働く理が何時も目の前にアリアリと見えるやうでなければなりません。

眞の信仰とは絶えず理の動きを神の姿を何時も見失はず、しつかり凝視めてゐる事であります。神の存在と云ふものは說明によつて知るものではなく、自身の體驗にて直觀するものであります。眞實誠の實行によつて神性を吾れと吾が胸中にアリアリと認識する事なのであります。

同じ人間で同じ仕事を爲すに、一方は普通の働きしか出來ないにも不拘、片方の者

は二倍三倍の働きをする。何故こうも違ふものであらうか。

それは總てを忘れて全精神を打込んでやるか否かにその理由がある。全精神を打ち込んでやれば、必ず能率が上るのであります。例へ周圍の人が怠けて居樣が居まいが自分だけは無駄な心を使はず定めた心、誓つた決心の前に斷乎として終始一貫す可きであります。

又神樣はお互ひに私達に次々と大きな仕事を與へてお試し下さるのであります。そう云ふ場合には必ず物質に惠まれんとか、人材に惠まれんとかで、一ッの仕事を二重にも三重にも手間を要せねば出來ん樣にあらゆる仕事に困難を與へられる。これは仕事の困難に耐え苦難に處する訓練を經る樣理の上の荒砥に掛け何處の方面に行きても働き得る樣道を教へて下さるのであります。

でありますから如何なる事でも根と熱心とで喜んで一生涯勇み切つた心でやり通すのが必要であり、その精神が所謂因緣切る理となるのであります。かくて苦を追ひ苦

を求めてその苦を克服して行く人でなければ自分の働により子に孫に迄安神立命の道を與ふる事は出來ない。

例へば皆樣方の中でもお助けさして頂いてゐる方が澤山ある事だと思ひますが、寢ても覺めてもお助け先の人の事許り考へて忘れんと云ふ人がある事だと推察さして頂きます。こう云ふ奇篤な人は自分の普段の氣持より絶えず先方の心を救ひたい。誠の人となつて頂き度いと祈つてゐる樣な熱心な方ですから、必ず一生涯道の爲その人の爲生命を投げ捨てゝも盡し度い。共に苦勞したいと云ふ方が出て來るのであります。又心の立替えとは何を云ふのでありませうか。

それは神の解釋因緣の心を諭らして頂き、人の爲道の爲には全く我身を忘れ捨て身の心となり、どのやうな事をも喜んでさせて頂く、犧牲的の精神、眞實實行の現れが所謂心の立て替えと云ふのであります。

お互ひにお助けにやらして頂き、只一人教理丈け說くのではなく、自分自身實際に

經驗した苦しみ惱みの生きた教理の中より人を教化して行かねばなりません。どうも彼の人のお話は何を云つてるやらさつぱり解らん。どうも悟る事は出來ない。

然し話は解らんが、何となく彼の人が戀しい。彼の人が來ると自然と氣が爽かになる。生みの親よりも懷しいと云ふ樣な氣持を起さす。

例へ其の人の話は下手で訥辯で、何も解らんが、多年道の上に眞劍に勤めた神の理が其の人達に斯ふ云ふ氣持を與へるのであります。『鐘が鳴るか、鐘木が鳴るか、鐘と鐘木の間が鳴る』と云ふ空間の微妙な働、卽ち理の動、德の力、永年力一杯勤めた眞實がそこに現れて來たのであります。

或る教會で東本には參拜人が澤山集ると云ふ事を聞き、其の眞似を仕樣と色々の方法で人を寄せる事を考へ、お話の上手な實行家の先生を雇ひ切りで活躍させました所その先生の居る時丈けは澤山集つて來るが、先生が國へ歸つて仕舞ふと最う誰も來ない。空つぽになつて仕舞ふ。なる程宣傳によつて瞬間的の理は働くが本當に積み上げ

られた理と云ふものはないから永久的持續性がないのであります。

且て私は月島に教會を持つて居りました時の話ですが、理の勸めと云ふ事を忘れ、教會の事のみ考え、普請も新らしく出來、あと風呂場を造れば外觀だけは立派な教會が完成されると云ふ時、あの有名な大正六年の東京灣の大海嘯に襲はれたのであります。折角の教會も何條以てたまる可き、僅かに門柱と台所の一部を殘して後は悉く海水に呑まれて仕舞つたのであります。私は絕望の淵に投げ込まれた思ひがしました。今日と云ふ今日が日迄一所懸命に神の爲慘憺の苦心を拂つて來たのに如何に天災地變とは云へ、今は餘すに何ものもないのだ。神坐す教會は流された。教會を失ふて何の神樣ぞや。心は暗澹としてかき曇つたのであります。

ところがどうでせう。信徒先に續々と御意見者が現れ、みるも哀れな教會の殘骸をめがけて參拜者が一人二人と次第に數を增して行つたのであります。そこで私は翻然として悟らして頂きました。例へ形は消えても理は殘るものである。理の働きは恐ろ

しいものであると云ふ事を切實に考へさして頂きました。そこで早速更新の意氣を以て教會復興にかゝらして頂き、捲土重來、布教戰線に拍車をかけたのでありました。

又道の者は個人の理を造らして頂く樣腐心す可きでありませう。お互ひに形だけの勤でなく、個人々々の理を生涯積まして頂いてどのやうな仕事でも着々と片付けさして頂かねばなりません。このやうな態度で萬事に處する根柢になるものは信仰の力でありませう。信仰は天學であると私は申上げたい。天より與へられた學問、それは神より無限の理を仕込まれた蹉跌のない生涯の守として頂く確かな道であります。

最早立教百年五十年祭も目睫の間に迫つて參りました。天理教が世界的に發展伸張する日も遠くはありません。

どうか皆樣の燃ゆるが如き白熱的信念と根と熱心とをもちまして益々お道の爲誠の實行眞劍な働をなされん事を偏に御願ひするものであります。

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月十九日發行
定價 金二十錢

著者 東京市本所區厩橋一丁目廿番地 天理教東本中教會長 中川庫吉

發行者 東京市本所區厩橋一丁目廿番地 中川庫吉

發行所 東京市本所區厩橋一丁目廿番地 六踏園東京總事務所

印刷所 東京市京橋區木挽町三丁目十一番地 丸ノ内印刷所

終